僕のヒーローアカデミアwithウルトラマン

混倫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日死んでしまった主人公が転生し、ウルトラマンの力で物語を動かしてく…ようなストーリー

▼あまりヒロアカ×ウルトラマンというのがないので書きました▼不定期ですが、よろしくお願いします。

目次

転生 1
転機到来 5
友達獲得 10
雄英襲撃 15

転生

俺の名前は鏑木遥、俗に言う転生者だ。
前世では漫画やアニメ、ゲームに特撮を愛すただのオタクで
別に親に虐待されてたわけじゃないし逆に仲も良かった、
学校ではちょっと浮いてはいたがそれも許容範囲だった筈だ。
たぶん…
そう信じたい（泣）
そんなことは置いといて、俺の死因は溺死だった。
あの日は、巨大な台風が接近しており、
あらゆる川が氾濫していた。
そんななか俺はコンビニからの帰りの途中の川で
溺れている子犬を見つけ、助けようと飛び込み、
子犬を助けることができたが俺はそのまま波に
流されてしまい死んでしまったのだ。
そのことに関しては別にどうとも思ってないから

別にいいけど。
あの子犬結局どうなったんだろ？幸せに生きてたら
嬉しいな。
俺の分まで強く生きろよ!!
まぁ、そんなことがあり俺は死んでしまったのだ。
前世の記憶は〝僕〟が今世の５歳の〝個性〟の発現とともに思い出した。
今世の僕の両親はともに〝ヒーロー〟の
サポートアイテムを作ったりするエンジニアで
その業界では割と有名な人らしい。
なんでもビルボードの１０位圏内の人たちにも
作ったことがあるとよく酒を飲んでいる時に
耳がタコになるくらい聞かされるから
覚えてしまった。
そんな愉快な家族のもとに生まれたのがこの僕、
鏑木遥である。
ちなみに僕の容姿はマジもんの美少年だった。
さて、ここで大体の人が僕がどこに転生したか気づいただろう。

そう僕はなんと数あるジャンプ作品の中でも屈指の人気を誇る『僕のヒーローアカデミア』の世界へ転生してしまったようだ!!
僕が初めてその事に気づいたのは前世の記憶が戻り、
両親のことがわかった数時間後くらいの出来事だ。
前世と今世の記憶が混じりまくって混乱してた時に
ふとテレビをつけて状況を整理しようとテレビをつけると
そこにはあのヒーローがいた。
そう、オールマイトだ!!
まじで気づいたときの興奮具合ときたら黒歴史判定を受けても
おかしくないようなものだった。
そしてその大騒ぎの声に気づいた両親に頭がおかしくなったと思われ病院につれてかれたが、特に問題もなく逆にそこで僕の個性が発現したことが発覚したのだ。
僕の頭がおかしいと思われ病院へ行き、そこで個性発現をしてるとは…
なんか軽い黒歴史じゃないか。
僕、前世の記憶が戻って何回黒歴史作れば
気が済むんだろ…
その日はお祭りムードで寿司屋へ行き、

滅茶苦茶楽しんだ。
ちなみに僕の個性はある意味チートだった。
それに気づいた僕はそこから死ぬ気で勉強し、
念願の天下の雄英高校に入学が叶ったのだった。

転機到来

雄英入学から早数日、
俺がいたのはヒーロー科…

ではなくサポート科だった。
待ってくれ、話を聞いて欲しい。
これにはちゃんと理由があるんだ。
大きな理由としたら個性のせいなんだ。
僕の個性は『発明』。
能力としては、
『自身が想像した物に近しい物を生み出すことができ、
作った物の品質が上昇する』と言うものだ。
この個性の面白いところは恩恵を受けられるのがもちろんサポートアイテムから料理、建築、プログラム、作文とかなり広い範囲で受けられるところ。
父親の個性が『想像した物の設計図を生成する』で、母親が『作った物の品質を上げる』だったので、その影響からだろう。
たしかにサポート向きだろうが僕が目指しているのはヒーローであり正直ヒーロー科にいる八百万さんの劣化と思われるだろう。
実際個性発覚の時は僕もそう思ったし。
しかし皆さん覚えてるでしょうか？

この学校、体育祭で実践残せばヒーロー科に編入できるんですよ。
実際C組の心操君もそうでしたし。
流石に入試のあのロボを倒すのは今の僕では不可能に近いです。
でもサポート科で自分の求めるサポートアイテムを
作ればいいんじゃないかと考えたわけなんですよ。
幸い今世は親譲りなのか頭も良かったから勉強もできたのでそこまで困りませんでしたしね。
そして今に至るのだ…
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
さて回想も終わって今は放課後、僕が工房で〝サポートアイテム〟を制作していると
パワーローダー先生から呼び出された。
いったいなんなんだろ?
僕何もしてないんですが?
そしてパワーローダー先生がいる職員室まで行くと話が始まった。
「あの~先生、僕何かしましたか?」
パ「⁇なんでそう思ったんだ?」
「え、なにかまずいことをしたから呼ばれたのかと」

パ「そんなことはないぞ。今回呼んだのはお前に話があるからだ」
はなし？いったいなんのことだろ??
パ「お前たしか編入考えてるよな」
「はい、たしかに考えてますけどそれが何か？」
パ「今度ヒーロー科のＡ組がＵＳＪで訓練するんだが見学する気はないか？」
「なんですと!?」
原作ではそんなのなかったよね!?いったいどうしてだ？
「あの、どうしてそんなことになったんですか？」
パ「あぁ、それは今回校長からの提案で『ヒーロー志望の生徒が早いうちになにをするのか知れた方が良くないかい』と言う意見が出てな、それで編入を考えてる見込みのある生徒を対象に授業見学をしようって考えになったからだ」
まぁ、たしかに筋は通ってるのかな？
パ「それでどうする。嫌なら別に無しでもいいんだが…」
「はい、行ってみたいです!!」
たしか今制作してる〝サポートアイテム〟も完成に近いし使えるかも知れない。
パ「じゃあそう伝えておく。あとＣ組からも１名参加者がいるからな」
そして話は終わり工房へ帰った。

C組から誰が来るんだろ？楽しみだな!!

思いを胸に僕は作りかけのサポートアイテムを完成させていったのだった

友達獲得

パワーローダー先生の話から数日後、ヒーロー科の授業見学の日が来た。
いやぁ～、この数日、開発中だったメカを大至急で完成させここまで来たのである!!
そのためかちょっとだるいですけどまあ大丈夫でしょう。
そういえばこのくらいのときに何かあったと思うけど気のせいでしょうか？
原作に関係してくるようないイベントがあったと思うのですが…
なにぶんもう転生して１０年以上経ってますから記憶があやふやなんですよね。
なんでしょうか、この喉の魚の骨が気になるような感じ…すっごいモヤモヤします。
いったいなんなんでしょうか？
そんな風に考えごとをしているといつのまにか集合場所に到着していた。
そこにはＡ組の人たちとＣ組の僕が一方的に知ってる人がいた。
？「あ、もしかして君が授業見学のもう一人の人かな？」
なんかいかにもｔｈｅ委員長みたいな人に話かけられてたんだが…
「あ、はいそうですが…あなたは？」
？「やはりそうですか!!俺はこのＡ組で委員長をしている飯田天哉だ」

なんと!?メインキャラの飯田君じゃないですか!!
「どうも、サポート科から来ました鏑木遥です。よろしくお願いしますね、飯田君」
まさか会えるとは思ってましたがほんとに会えるとは…
飯「こちらこそよろしく。そしてあそこに一人いるのがC組から来た人だ。挨拶をしておいてくれ」
そう言われ、もう一人の見学者の方へ向かっていき挨拶をした。
「初めまして。サポート科から来ました鏑木遥です」
「……どうも、C組の心操です。よろしく」
そう、C組からの見学者はなんと心操君だったのだ!!
なんと、こんな偶然があるのでしょうか!!
たしかに彼はC組から編入するがまさかこんなとこで会えるとは感激です!!!
「あの、心操君はなんでここに来たんですか?」
心「……俺の個性は戦闘向きじゃなくてな。試験で落ちたんだよ。
でも夢を諦めきれずヒーロー科に編入しようと頑張ってたら担任に
今回のことを教えてもらってここに来たんだ。」
「なるほど…すみませんでした」
心操「?　なんでだ?!」

「えっ、だって聞かれたくないことを聞いてしまったので…
　こんなんだから僕友達が少ないんですよ」
　はぁ、やっぱりこんなんだから僕はいつもぼっちなのでしょうか。（？ д？。）。
　そんなことを思っていると急に心操君が笑い出した。
「ちょっ、心操君いまの話に面白いとこなんてありましたか!?」
　心「いや、そんなこと言われたのは初めてだったから」
「そうだったんですか…　　全然そんな風には見えませんが」
　心「俺の個性『洗脳』でな。この個性のせいで周りから『あいつ敵だ～』とかっていじられてきたからさ」
　心操君はそう言うとどこか悲しげな表情をした。
「僕はそんな風に思いませんけどね」
　そう僕が言うと心操君は驚いた表情でこちらを見てきた。
「だって個性ってのは人がどう使うかによって変わりますしね。」
　心「それは…どうしてだ?」
「いや、例えば平和の象徴であるオールマイトの個性だって人にその力を向ければ敵となんら変わりありません。それと同様に心操君の『洗脳』という個性だってたしかに悪い印象を持たれたやすいですが災害現場

や敵の立てこもりのときだって周りに被害を出さずに解決できます。
そう考えれば僕はオールマイトより君の『洗脳』の方がすごいと思いますが」
僕の話終わると心操君はどこかスッキリしたような表情でこちらを見ていた。
「あの、どうかしました？」
心「いやなんでもない、ただ面白い奴だなと思ってな」
「そうでしょうか？僕はそんなことないと思うのですが」
心「やっぱり面白いよ。
改めてよろしくな鏑木」
「？よくわかりませんがよろしくお願いしますね、心操君」
話が終わると趣味のことなども話し合った。
すると心操君がどこか不思議そうにこちらに話を振ってきた。
心「ところで鏑木、さっきから気になってたんだが腰につけてるその〝カードケース〟
と〝リング〟みたいなのはなんだ？」
そう心操君が質問してきた。
「あっ、これはですね……」

飯「そこの見学者の二人、早くバスに乗りたまえ!!」
僕が答えようとすると飯田君がそう言ってきた。
「じゃあ、また機会が来たら説明しますのでいきましょう。心操君」
心「ああそうだな」
そして僕たちはバスの中へ向かった。
いまさらだけど忘れてたものいったいなんなんだろう??
まぁ、忘れるくらいなら重要なことじゃないのかもね!!

雄英襲撃

やっと到着しましたよ…
本当に大変でした。
バスの中ではA組の人たちに質問責めに遭いながらも
今にも殺してきそうな目でこちらを見ている爆豪君。
本当に心臓がいくつあっても足りませんよ…
しかも心操君はそれに気づきながらもこちらを助けて
くれませんでしたし
「心操君なんで助けてくれなかったんですか?」
心「いや、自分が巻き込まれるのも嫌だし。それに…」
「それに?」
心「お前の姿が面白かったからな」
「なるほど。あなた実はSなんですね」
心「そんなことねぇよ!!」
ほらやっぱり

「まぁ、別に人の性癖をどうこう言うつもりはありませんが
　流石に次は助けてくださいよ」
心「お前人の話聞けよ!!」
そんな風に話していると、
？「遊びなら他所でやれ」
「「あ、すいません」」
？「次はないからな」
話の声が大きかったせいか先生に注意されてしまった。
静かにしとこ（・ω・、）
相「あー、今回は授業見学だから一応自己紹介しておく。
　俺は相澤消太。Ａ組の担任だ、よろしく」
１３号「そして僕は１３号です。よろしくね」
「「よろしくお願いします!!」」
あ～、楽しみだな。
１３号「え～、演習を始める前にお小言を１つ、２つ…」
(((あ、これ長くなるやつだ)))
そう演習が始まる前から生徒一同考えるのだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

そこから１３号先生からのお小言がやっと終わった。

結構長かったですね…

すると

相「！　一塊になって動くな！１３号！生徒を守れ!!」

空間が黒く歪んでいき、どんどん大きくなっていく。

「えっ?」「なに?」「先生?」

Ａ組のみんながそう騒ぎ出す

切「なんだありゃ?　また入試の時みたいなやつか?」

心「鏑木、これって…」

「どうやら想定外のことが起こってるようですね…」

そして僕はやっとここで今まで抱いてた違和感に気がついた。

(そうだ、確か今日は…)

するとそこから手だらけの男が出てきた。

相「動くな！あれは敵だ!!」

(ＵＳＪ襲撃の当日だ!!)

？「イレイザーヘッドに１３号ですか…

先日頂いたカリキュラムにはオールマイトも
いるはずなんですが…」
？「どこだよ…せっかくこんなに連れてきたのに…
平和の象徴オールマイト…
子供を殺せば来るのかなぁ…？」
敵の襲撃によって騒ぎ出した
上「はぁっ　敵んん!?アホだろ!?ここヒーローの学校だぞ!?」
八「先生！侵入者用のセンサーは!?」
１３号「もちろんありますが…」
轟「ここだけか学校の他の場所もなのか…
どっちにしろセンサーが反応しねぇってことは
敵のなかにそういうことが出来る個性を持った奴が
いるってことだ。しかもここは校舎から離れていて
向こうはこっちの行動の情報を手に入れての襲撃。
バカやアホじゃねぇ…少なくともなんらかの目的があって
用意周到に画作された奇襲だ」
相「とにかく１３号避難を開始しろ!!学校にも連絡を試せ!!

侵入者用センサーが反応しないということは妨害する個性を持った
相手がいる可能性がある！上鳴！お前の個性でも試せ!!」
上「っす！」
緑「先生はどうするんですか!?まさか1人であの数を相手にするんですか!?
イレイザーヘッドの戦闘方法は個性を消してからの捕縛のはず…
正面からの戦闘は…！」
相「緑谷…一芸だけじゃヒーローは務まらん!!」
すると相…いやイレイザーヘッドは敵の方へ向かっていった
13号「さぁ、皆さん避難しますよ!!」
緑「でも…」
??「おや、逃すとお思いで?」
すると僕たちの目の前に黒い霧のような男が現れた
?「はじめまして。我々は敵連合。僭越ながら…
このたびはヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは
平和の象徴である、オールマイトの息絶えていただきたいと
思ってのことです。本来ならオールマイト入るはず…
なにか変更があったのでしょうか?

まぁそれは関係なく…。」
敵が何かを言おうとするとそこに爆豪君と切島君が攻撃を仕掛けるが避けられる
爆「その前に俺たちにやられることを考えてなかったのか!?」
？「危ない…危ない…そう……生徒といえど優秀な金の卵…」
１３号「ダメだ、どきなさい！２人とも!!」
１３号先生がそう言うがもう遅く
？「散らして…嬲り殺す!!」
敵の黒い渦が僕たちを覆うように広がった。
（これはまずい!?）
僕は近くにいた心操君の手を掴んだ
「心操君…」
心「鏑木…」
そこで目の前が真っ黒に染まった。